

102. シイタケのほだ付きと子実体の発生について (I)

— ほだ付きと発生量との関係 —

林業試験場九州支場

温 水 竹 則
日 高 忠 利
久 保 田 暢 子

1. はじめに シイタケのほだ付きと発生量との関係について過去10余年にわたり林業試験場宮崎分場構内ほだ場で行なった試験の概要を報告する。なお本試験の統計的処理について御指導援助をいただいた栗屋経営研究室長に厚くお礼を申上げる。

2. 試験の方法、大葉(7-1)と中葉16-3、6-6)系統を選び、コナラ原木にそれぞれの種菌を接種して、大葉と中葉系統のほだ付きと発生量をしらべた。ほだ付きの調査は、2~3月種菌の接種をした年の7月および翌年7~8月の2回、ほだ付本数とほだ付面積をしらべ、ほだ木1代(6ヶ年間)の発生量と年度別の発生状態を検討した。ほだ付き率は、害菌の寄生により害菌子実体の発生および変色面積(外観から不明な部分については、斧で切れ込みを入れ、害菌とシイタケ菌の発育による樹皮の抵抗力、樹皮下のシイタケ独特のほだ付きの色拵などによって差別)とほだ付き面積を算出して、ほだ木1本の全表面を100と

した値に対するほだ付き面積であらわした。

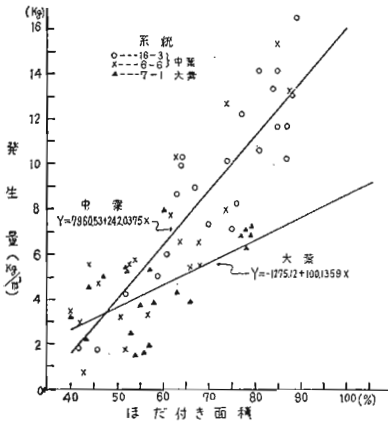
3. 結果と考察

ほだ付きと発生量との関係は第1図のとおりで系統別のほだ付き率と発生量の回帰をほだ付面積別に求めたところ回帰係数間には、差が認められなかったが、回帰定数は、16-3、6-6と7-1の間に有意差が認められた。回帰式は16-3、6-6と7-1の両系統について求めた。第1表は第1図から得た大葉と中葉系統の発生量の推定値である。ほだ木1代の中葉系統の発生量は、大葉系統より多く、つまり中葉は1㎡当り16,243kgに対し、大葉は8,739kgである(推定平均値の信頼区間、大葉は6,293~11,184kgで、中葉は14,760~17,726kg)また両系統別の総発生量に対する年度別の最大の発生期は中葉では2年目で、大葉は3年目で、かつ大葉系統は最大の発生期が緩慢で、毎年ほぼ平均した発生をするため外観的には、発生が多いような錯覚をおこしやすい。

第1表

乾シイタケの大葉種と中葉種の収穫量比較
累年平均(大葉 $\frac{1}{10}$, 中葉 $\frac{1}{12}$)

第1図 シイタケのほだ付きと発生量との関係



系統区分	ほだ付き	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	合計	原木1ト ンに対する 収穫率
		%	kg	kg	kg	kg	kg	kg	
大葉種	40	0.112	0.625	0.650	0.587	0.402	0.336	2.730	0.3
	50	0.153	0.855	0.888	0.802	0.575	0.459	3.732	0.4
	60	0.194	1.084	1.126	1.018	0.729	0.582	4.733	0.5
	70	0.235	1.313	1.365	1.233	0.883	0.705	5.734	0.6
	80	0.276	1.543	1.603	1.448	1.037	0.829	6.736	0.7
	90	0.317	1.772	1.841	1.663	1.191	0.952	7.737	0.7
	100	0.358	2.001	2.080	1.879	1.346	1.074	8.739	0.8
年度別収穫率		%	%	%	%	%	%		
		4.1	22.9	23.8	21.5	15.4	12.3		
中葉種	40	0.108	0.602	0.496	0.305	0.155	0.055	1.721	0.2
	50	0.261	1.449	1.193	0.733	0.373	0.133	4.141	0.4
	60	0.413	2.297	1.890	1.116	0.591	0.210	6.562	0.6
	70	0.566	3.144	2.587	1.590	0.808	0.287	8.982	0.8
	80	0.718	3.991	3.284	2.018	1.026	0.365	11.403	1.1
	90	0.871	4.838	3.981	2.447	1.244	0.442	13.823	1.3
	100	1.023	5.685	4.678	2.875	1.462	0.520	16.243	1.6
年度別収穫率		%	%	%	%	%	%		
		6.3	35.0	28.8	17.7	9.0	3.2		

注) 原木1㎡は1035.636kg (伐採1ヶ月後の重量)